三鷹市立第五中学校　令和8年度【外国語】授業改善推進プラン

	前年度授業改善推進プランの検証	学習状況の現状と課題	指導方法の課題と授業改善策
第1学年	○無理のない量の課題を定期的に出すことにより取り組める生徒が増えた。 ◎タブレットに配信される「音読シート」を自己調整をしながら活用している。 ◎単元レポートをタブレット等を使い、わかりやすく、まとめることができるようになっている。授業で学んだことを自分で整理できるようになっている。	○帯活動における、ペアワーク（Q&A）ではほとんどの生徒が定型文を暗唱している。今後は既習事項を使ってオリジナルな自己表現をしようとする生徒を増やすために例文を工夫していく。 ○帯活動における、動詞の復習ではかなりの生徒が発音できるようになっている。今後はスペルを身に付けさせる。 ○新しい文法事項のインプット、インテイクまではできている。今後はアウトプットさせる場面の設定を増やしていく。	○低習熟度層への学習支援。定期考査前の補充教室を複数回設定することや、自分で目標（合格点）を定めさせてスペリングコンテストに挑戦する機会を設定する。また単元テストへの取り組みに対する細かい指導（ノートやワーク）を実施する。 ◎タブレットに資料を配信し、全員に確実に教材が行き渡るように工夫した上で、音読練習時に自分のレベルにあった学習方法（自己調整）で進められるようにシートを工夫する。
第2学年	○生徒による自己評価、学園研究で小学校から続く課題として挙げられている「書くこと」にいて、継続的な小テストや定期考査を通じて、必修単語のおおよそ５割程度であれば書ける生徒が増えてきた。 ◎学習習慣の定着と効果的な学習方法の確立を目指し、自主学習方法の共有と個に応じたアドバイスを継続した結果、中間層の生徒の一部に学習意欲の高まりと学力の伸びが見られるようになった。	○単純なリピーティング、反復練習、ごく短い英文を使ったコミュニケーション活動であれば抵抗感なく活発に取り組む生徒がかなり増えてきた。その一方、「0から英文を組み上げる」「例文を自分のことに置き換える」といった応用的な活動には自信の無さからか躊躇する生徒が多い。 ◎基礎内容の定着を実感し、表現活動で満足のいく結果が出たことでさらに学習に意欲的に取り組もうとする好循環を得た生徒がいる一方、極めて初歩的な内容にもつまずきを感じ、英語学習に対して強い抵抗感を覚えている生徒もおり、両者の差が広がっている。	○小テスト・単元テストの回数をさらに増やし、短いスパンで基礎内容の定着を実感させる機会を与える。その結果、自分のレベルを把握しその後の課題を選択（自己調整）させたうえで、課題解決目標に向けた主体的な取り組みを促す。英文作成・長文読解では、フレーズ・チャンクを活用し小さな節を組み立てて英文を構成させていく練習の機会を授業で設け、２年生の終わりには「住んでいる地域・街のことを5文以上の英文で表現する」ことができるようになるという目標を全ての生徒に設定する。 ◎自主学習ノートのコピーを活用した学習例の共有を通じて、環境・時間・内容面で様々なアプローチを模索し続ける生徒の育成を目指す。また、生成AIを協働学習者として活用させるための指導も並行して行う。
第3学年	○前年度の課題であった、英語を話すことへの抵抗感や自己表現に対する苦手意識の軽減を目指し、コミュニケーション活動を重視した授業を展開したことで、文法的な誤りは見られるものの、半数以上の生徒が自分の考えや思いを積極的に相手に伝えようとする姿が見られ、英語による自己表現の意欲の向上がうかがえた。 ○単元末の振り返りレポートにおいて、学習した文法事項を整理し、自分の言葉で説明し直すことで、自身の理解が不十分な部分や曖昧な部分を明確にし、学習上の課題を自覚できた生徒も見られた。	○教科書本文の学習において、モデル音声に続くリピートやシャドーイング、リード&ルックアップなどの音読活動を繰り返し取り入れたことで、英語の正しい発音やイントネーションを意識し、自信をもって音読できる生徒が増えた。 ○帯活動における長文読解では、目標時間を単語数に合わせて設定し、速読力の育成を図っている。また、黙読、音読、QAの順に活動を展開し、読み取った情報を整理する力も育成していく。 ○コミュニケーション活動において、質問されたことに正しく解答する力は定着してきているものの、自分の回答に情報や考えを付け加えたり、相手の発言に対して追加の質問をしたりすることが難しく、やりとりを継続、発展させる力に課題が見られる。	○引き続き、自己表現力の育成を目指し、「書くこと」や「話すこと」の活動を積極的かつ段階的に取り入れていく。また、ALTと連携し、生徒一人ひとりの表現に対して具体的かつ丁寧なフィードバックを行うことで、自身の課題や改善点を把握し、次の学習活動に活かせるようにする。 ○日常的な声掛けを通して、生徒が自身の学習状況に応じて学習方法を選択できるようにする。例えば、本文理解の活動では、音声のみで内容を聞き取る方法や、教科書を参照しながら読み取る方法を提示し、生徒自身が理解度に応じて学習方法を調整できるように支援をしていく。